



TITLE:

倉敷天文臺通信

AUTHOR(S):

---

CITATION:

倉敷天文臺通信. 天界 1932, 12(133): 202-202

ISSUE DATE:

1932-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161954>

RIGHT:

## 倉敷天文臺通信

三月には多くの會員の訪問を受けた。

5日の公開日の夜、岡山の永瀬君と珍天體をさがして遊んだ。どういふわけか海王星が見つからなかつたが、この夜は餘程運が悪かつたらしい。

18日の朝、顔も洗はずに太陽をしらべてゐると、小郡の山田君が來訪された。去年十一月の廣島の總會以來特に親しくしてゐるので、「倉敷の吉備團子」で茶宴を開いてゐるところへ、山本博士夫人來訪され、小郡のお土産 「白外郎」と京都の名物 「ハツ橋」を加へて大いに賑かになり、三人連れて大原美術館に泰西名畫を賞で、正午山本夫人を驛へ送つて後は、山田君と黃道光その他について懇談し、夕方御わかれした。

21日には福知山の鹽見幸三君を御迎へした。大いに飲み（但しお茶をです）大いに談じ、全く天下を取つたやうであつた。

22日は月蝕である。朝からあやしかつた空は殆んど絶望になつたが、早くも夕刻に岡山の水野先生と京都の山本進君（博士第二世）が來られ、早速三人で會食した。といふと如何にもよく準備が整うてゐるやうに思はれるであらうが、實のところ先生御持參の御馳走が主人もろ共といふ誠に虫のよすぎる話で、こんなことは今後も度度あつてほしいものである。

やがて倉敷の三好、森兩君と、岡山の中藤君と、九州下りの御途上である大阪の大口君を加へた。意外の珍客揃ひに雲も氣をきかして少くなり、原名譽臺長が御いで下さつた頃から空は快晴、幸に多くの觀望者をたのしませ、三好君が二枚撮られた。大口君とは夜半まで痛談した。

25日には函館の藤森登志子さんが九州方面への大旅行の途上を立寄られた。29日には長崎の絹笠山氣象觀測所の繪葉書をいただいた。

最後の31日に郷里玉島の安原久美子夫人が來訪された。夫人は私の和歌の先生である。歌物語がはじまつてゐるところへ、六高の東君が加はられ、にぎやかであつた。

倉敷天文臺の屋根の下にはつくしが生える、つくしを摘んでおすしをする時には、皆さんに御案内狀を差上げますから——。（荒木健兒）